

(独)国立科学博物館(以下、科博)の  
新宿分館(東京都新宿区)は、平成24年4月、  
筑波地区(茨城県つくば市)に移転しまし  
た。その結果、5研究部による研究機能と  
400万点を超える所蔵標本・資料が集結  
し、筑波研究施設として新たにスタート  
しました。それに伴い、自然史標本棟と  
総合研究棟が新築されました。

### これまでの科博から 筑波研究施設へ

科博は上野(東京都台東区)に本館を  
おき、新宿分館、筑波地区、付属自然教育

園(東京都目黒区)から構成されていま  
した。そのうち新宿分館には、動物・地学・  
人類・理工学の4研究部があり、同時にそ  
の資料が所蔵されていましたが既に過  
飽和状態にあり、資料の一部は、植物研  
究部と実験植物園がある筑波地区の資  
料庫に分散して所蔵されていました。

そこで私たちは、分散所蔵を打開して  
効率的な研究を行うこと、研究部の枠を  
超えた新しい横断的な研究を行なうこと、  
さらに事務業務を集結して効率化をは  
かることなどを掲げて、筑波地区への移  
転を決断し電光石火の勢いでそれが実

現しました。自然史標本棟と総合研究棟  
が竣工し、既存の資料庫2棟が改修され  
て理工学資料棟に生まれ変わると、いよ  
いよ標本・資料と研究室の大移動が始  
まり、やがて平成24年4月、筑波研究施設  
が始動しました。

### 自然史標本棟の概要

自然史標本棟には、約200万点の動物  
標本、約24万点の地学標本、16万点余り  
の人類標本を収蔵し、植物・菌類標本約  
170万点の一部を収蔵しなくてはならず、  
かつ今後約10年間に想定される標本増



多様な動物の液浸標本を収蔵する液浸標本室。



高層化により著しく収蔵能力を高めた貝類乾燥標本室と  
昆虫標本室。

数の標本室に分散しており、研究者はこ  
れらを一同に収蔵できる標本室を待ち  
望んでいました。それを実現したのがこ  
の液浸標本室で、床面積約1,000平米の  
フロア全体に、移動棚(間口900mm・  
奥行き500mm・高さ3,100mmのオー  
プン棚を8連×70列、10連×70列)配置  
しました。移動棚の駆動方式には、科博  
の標本室では初めての電動式を採用し  
ました。液浸標本の性状は様々で、非常  
に脆弱で衝撃を嫌うものも多く含まれ  
ることから、緻密にマイコン制御され  
たシステムを用い、スロースタート・ス  
ローストップが最適化される条件設定を  
行ないました。

貝類の乾燥標本室(貝殻標本を収蔵)  
も見事な出来栄です。科博のこの分野  
は、河村コレクション(河村良介氏(1898  
~1993年)収集)、櫻井コレクション(櫻  
井欽一博士(1910~1993年)収集)と  
いう世界屈指の2大コレクションのほか、  
歴代研究者が採集した膨大な標本を所  
蔵しています。ところが新宿分館では、  
それらがコレクションごとに収蔵され  
ており、分類群ごとにコレクションを再  
構成したいというのは研究者の長年の

夢でした。それを実現すべく設計され  
たのが、天井高いっぱい至スチール製の引  
き出しを重ねた移動棚でした。地震等  
による引き出しの飛び出しを防ぐため  
に、強力マグネットによる安全策も講  
じてあります。

昆虫標本室も、貝類乾燥標本室と並  
んで収蔵能力を著しく向上することが  
できました。昆虫標本は、ドイツ箱とよ  
ばれる完全に規格化された標本箱に保  
管されているため、科博では従来から  
ドイツ箱を積層して収納するキャビ  
ネットを採用してきました。このキャ  
ビネットを新調して移動棚に設置し、  
さらに新宿分館で使用していたもの  
も動員することでこれまでの2倍近い  
収蔵能力を確保しました。

### ナショナルコレクション としての科博の標本・資料

科博の標本・資料収集のポリシーは、  
日本およびその周辺地域・海域の自然  
史標本と科学・技術史資料をはじめと  
して理工学資料を収集し、ナショナル  
コレクションの構築を目指すことにあ  
ります。科博のコレクションは量的に  
膨大なだけでなく、生物分類学の基  
礎となるタイプ標本、絶滅種や絶滅  
危惧種の標本、生きている絶滅危  
惧植物、さらに理工学資料では重要  
文化財を含んでいます。もちろん、  
珍奇なものだけを収集するのでは  
なく、ありふれた普通種の収集にも  
努めており、質・量ともに我が国の  
最高水準にあります。



電動棚の駆動試験。棚には標本に見立てた錘をのせて  
加速度センサーを設置し、マイコンの設定を最適化した。

## 新宿分館の筑波移転と 自然史標本棟の建設

### 独立行政法人 国立科学博物館

倉持 利明(国立科学博物館 動物研究部 海生無脊椎動物研究グループ長)

分を収蔵するよう設計されました。収蔵  
する標本の形状は多様で、動物の剥製や  
骨格、液浸標本、昆虫や貝類などの乾燥  
標本、岩石・鉱物・化石などの重量物、人骨、  
植物の押し葉標本などが含まれるため、  
床面積と天井高を最大限に活用して収

蔵能力を高めるとともに、標本の形状・  
性状、管理条件にそれぞれ対応した構造  
が求められました。さらに一部公開型の  
収蔵室(収蔵展示室)を設けました。

中でも圧巻なのが液浸標本室です。液  
浸標本とは、標本をエタノールなどの液

体の中で保存するもので、科博では古く  
から魚類、無脊椎動物、蜘蛛類、哺乳類、  
両生・爬虫類、鳥類など様々な動物の液  
浸標本を収集してきました。そのため、  
数が膨大なだけでなく容器の大きさや  
材質も様々な液浸標本が、新宿分館の複



広大な実験植物園の一角に新築された自然史標本棟①と  
総合研究棟②、研究管理棟③、植物研究棟④、資料庫2  
棟⑤は既存の施設で、資料庫は理工学資料棟に改修された。



鯨類はか大型哺乳類を収蔵する収蔵展示室。  
実験植物園の来園者は、ガラス窓越しにこ  
の風景を目の当たりにする。

### 独立行政法人 国立科学博物館(上野本館)

所在地/東京都台東区上野公園7-20  
開館時間/9:00~17:00  
休館日/月曜日(祝日と重なれば火曜日)、  
年末年始(12月28日~1月1日)  
URL/http://www.kahaku.go.jp